

## 平成 26 年度 化学研究所若手研究者国際短期派遣事業滞在報告書

生体機能設計化学 川口祥正

化学研究所若手国際短期派遣事業により、10月31日から11月30日までの間、フランスのパリ第6大学に滞在しました。パリ第6大学はノートルダム大聖堂の近くのパリの中心部にあり、その近辺は学生街としても有名なところですが、街並は石造りの立派な教会や建物が立ち並び、写真では得られない感動がありました。また、学生街ということもあり、夜になるとカフェでお酒を酌み交わしている若者の姿もよく見かけました。街中では、もちろんフランス語が話されており、生活する上で戸惑うこともありましたが、研究室内では英語で話しかけていただき、人の温かみを感じることができました。

今回滞在させていただいた **Sandrine Sagan** 博士の研究室は、膜透過ペプチドの創製やメカニズムの解明に向けて研究を行っており、細胞内に移行したペプチドを質量分析法により定量する手法を世界で初めて開発した研究室です。また、この研究室には生化学、物理化学、有機合成などの様々なバックグラウンドをもつ研究者が所属しており、種々の分野横断的な融合研究が行われています。

今回の滞在の目的は、質量分析法を用いた細胞内に移行したペプチドの定量法を修得すること、**Sagan** 研究室のメンバーと交流を深めること、海外の研究室の雰囲気を感じることになりました。実験面では、建物の改修工事に伴う研究室の引っ越しにより、セットアップ中な部分があり、**Sagan** 教授をはじめ、ラボのメンバーのサポートを受け、試行錯誤する日々でした。それを繰り返している内に、その手法にも慣れ、再現よく測定することができるようになりました。その一方で、日本とのギャップを感じることも多くありました。ワークタイムが9-18時くらいと短く、機器測定も専門スタッフがいないと測定できないため、最初はもどかしい思いもしました。しかし、時間内で実験を組み立て、休日は教会や美術館などを訪れ、フランス文化を学び、とてもメリハリのある充実した生活を送ることができました。さらに、日本での生活や実験を客観的に見直すことのできたよい機会となりました。今後も **Sagan** 研究室との共同研究が進むよう努力する所存です。

1ヶ月という短い期間ではありましたが、いろいろな方のサポートを受け、このように海外で研究をするという貴重な経験をさせていただいたことは、人生において財産になったと思っております。このような機会を与えていただき、化学研究所およびパリ第6大学の関係者各位に深く御礼申し上げます。

